

教育プログラムの概要及び採択理由

機 関 名	明治大学	申請分野(系)	人社系
教育プログラムの名称	複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム		
主たる研究科・専攻名	文学研究科史学専攻		
(他の大学と共同申請する場合の大学名, 研究科専攻名)			
取 組 実 施 担 当 者	(代表者) 吉村 武彦		

〔教育プログラムの概要〕

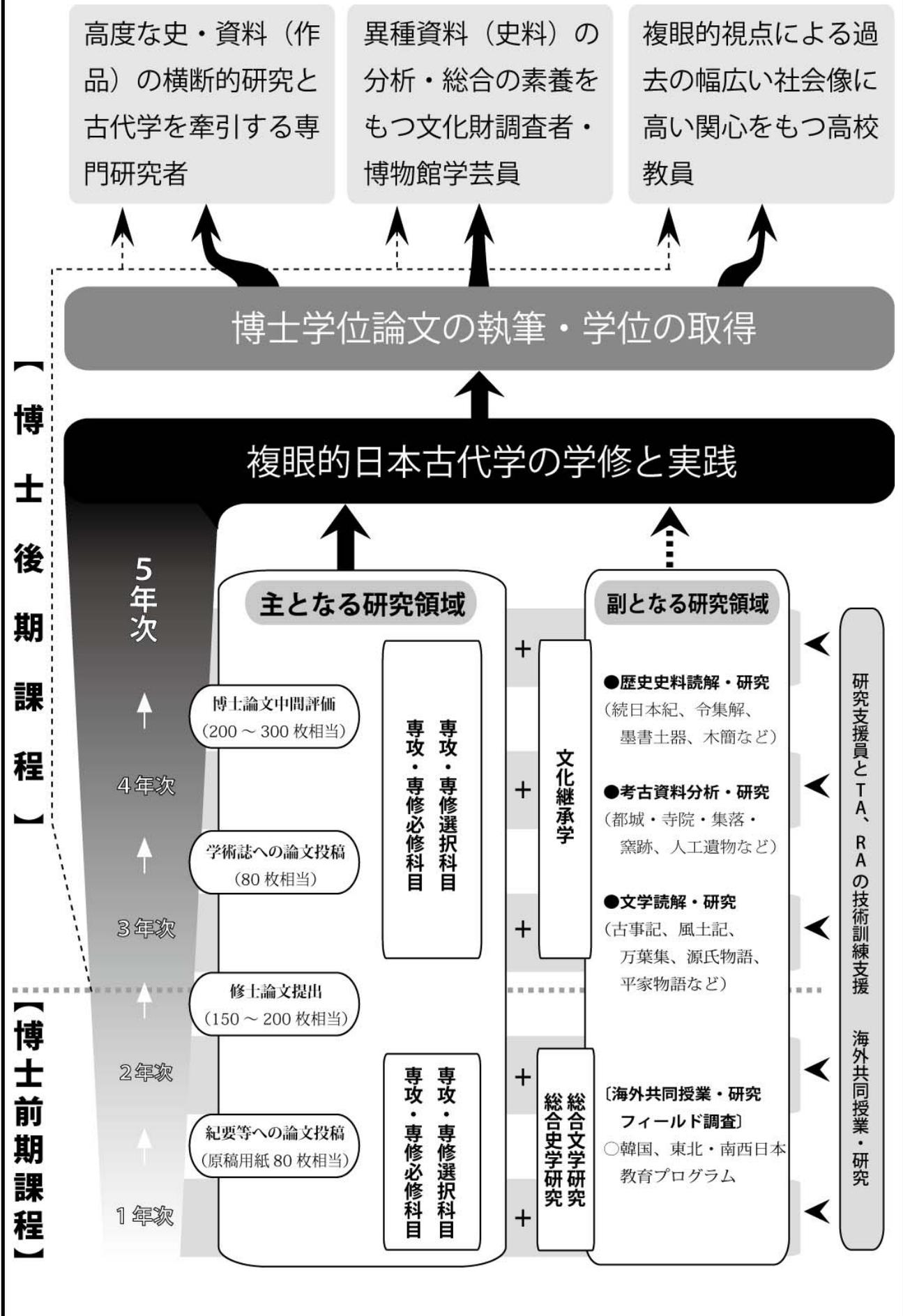
明治大学大学院文学研究科は、近年、従来の個別分散的かつ「内向き」ともいえる教育課程からの脱却を組織的に推進し、すでに学際的研究科目として博士前期課程に「総合史学研究」と「総合文学研究」を設置し、文学と歴史学や人文諸科学との関連を研究する「総合史学」の授業と、文学と思想および比較文学等を研究対象とする「総合文学」の授業を実施している。さらに博士後期課程では、史学・文学や日本・外国という国境のスキームをも相互に越境した研究科目「文化継承学」を設置している。こうした科目群は、学生の研究視野拡大とともに、研究成果の高度化にも大きな効果をあげており、課程博士の輩出にも貢献している。本プログラムは、このようにすでに定着しつつある学際的かつ国際的な教育カリキュラムを基礎に、本学でこれまで多くの実績がある「日本古代学研究」をベースにして、「史学」と「文学」の垣根を越えた新しいタイプの人材育成をめざすプログラムである。その実施にあたっては、文学研究科史学専攻と日本文学専攻の強固な連携を軸にして、博士号の取得が困難とされてきた人文系分野にあっても、博士号取得を組織的に実現させるための「教育プロセスを重視した教育研究指導」を行う。

本プログラムにおける「日本古代学」とは時系列を重視する歴史を軸に、物と言説からなる共時的世界の思想・文化に関する学問であり、弥生～平安時代を主対象とする。また「複眼的」とは、学際性と国際性を備えた学問的視座であり、主たる研究分野以外の分野にも越境して史・資料（作品）を自ら解析する能力、および近代国民国家の枠組みや権力構造の中心性に規制されないアプローチの二点に立脚した、研究対象の脱個別化と学問的柔軟性を意味する。

たとえば、日本古代史においては、木簡・墨書土器などの考古学遺物のほか、都城・官衙等の考古学遺跡からの検証、また和歌・漢詩・物語の文学テキストの解読に精通する必要性が飛躍的に高まった。そのため、出土遺物・遺構に関わる資料や文学・民俗事例などへの積極的な関与なしには研究が前進しなくなっている。さらに、国際的視点という意味では、活発に文化交流が行われ強い影響を受けたにもかかわらず、研究が不十分だった朝鮮半島との関係を明確に射程に入れた研究が必須になっている。このような古代研究の状況変化をふまえ、学術的・社会的要請に応えるため、学際的かつ国際的な日本古代学研究を体現できる人材を育成する。

この目標達成のため、史学・文学という「主となる研究領域」にかかわる科目とともに、上記「総合史学研究」「総合文学研究」「文化継承学」を「副となる研究領域」へのインターフェースとして活用し、研究対象を分析する理論とスキルの越境化を可能とする。史・資料の読解や各種方法論の技術的訓練については、研究支援員（ポスドク等）とRA・TAの雇用により日常的なレベルにおいて支援を行う。また、国際的視野を体得する方策として、連携実績のある韓国の慶北・高麗大と、日韓（朝）交流史にかかわる共同授業・研究調査を実施する。なお、学位取得のため前期課程では紀要等への投稿と修士論文の作成を求め、広い視野からの研究知識と方法論を学修できる組織的指導を行う。博士後期課程では、査読付き学術誌への論文投稿と博士論文執筆のための中間評価論文の提出を義務づける。本プログラムにおける越境的教育実践の内実は、他の研究分野にも適用でき、他の研究科および全国の大学院にも波及効果があるものと確信する。

履修プロセスの概念図（履修指導及び研究指導のプロセスについて全体像と特徴がわかるように図示してください。）



< 採択理由 >

大学院教育の実質化の面で、博士後期課程の学生を採用する「研究者養成型助手制度」など、優れた修学上の支援の方策が整備されている点は評価できるが、より幅広い専門分野を網羅した教員組織とファカルティ・ディベロップメントの実施体制の更なる充実が求められる。

教育プログラムは、細分化が進んだ個別分野を横断的に教育し、「学際的かつ国際的な日本古代学研究を体現できる人材」の養成を目指す、史学と文学の分野横断的で意欲的な取組となっており、大学院教育全体への波及効果も期待される。また、既存の共同研究室を拡充して「古代学教育・研究センター」を設置し、研究支援員等を配置して、史学専攻と文学専攻の共同の取組を集約的に推進する体制が整備されている点や、本教育プログラムに先行して分野・地域を越境した「総合史学研究」「総合文学研究」「文化継承学」の科目新設等、教育課程の整備が進められている点は、取組の実効性、実現性の面から評価でき、学長の強いリーダーシップの下での全学的な支援が期待できることから、支援期間終了後の展開も期待できる。ただし、本教育プログラムの実行にあたっては年次進行計画を一層具体化することが求められる。